

## 『吾輩は猫である』 逆上

Junko Higasa 2016.4.16

第八章。落雲館の生徒と苦沙弥の戦いが一旦落ち着いた後で、吾輩は「主人の大事件を述べた」と断っている。この個人的逆上大事件とは、大町桂月の「夏目漱石、文壇の流行りっこになったが『猫』は大したことない」という酷評に対する漱石大憤慨事件である。落雲館勢が打ち込む球は、批評家が世間を動かし作家に打ち込む殺傷力の強いダムダム弾である。これには臥竜窟で飛翔を控える竜であり、学者作家としてまだ禿に至っていない作者も、霊猫である主人公も手こずる。そこで漱石は文を以て文を制した。

前章では、桂月の「酒も飲まず道楽もせず趣味が狭い」という漱石評に苦沙弥の細君が異議を唱えた。本章では、吾輩が「逆上」と作家の「インスピレーション」の密接な関係を説明し、「滑稽物として滑稽足らず、詩趣ある代わりに稚気が免れない」という評に対して『これが主人の特色に存する事を記憶してもらいたい』単なる滑稽物ではない。一字一句に宇宙の哲理を含み真理に豹変する滑稽であると語る。

名医も治せぬこの憤慨「逆上」を諭す章末の哲学者の言は、漱石『文学論』記述の『あの男には誰彼の容赦なく悪口をいふ癖がある。ついこの間、林檎を痛く罵った。林檎でさへけなす男だから夏目の悪口位はいふだろう』という友人の慰めを彷彿させる。

しかし後に桂月と対面した漱石は「書いているものには敬服しないが、珍しい善人だ」と褒めている。